

新 除 草 剤

を50～100ℓの水に溶かして散布する。

本剤は接触剤であるので、加圧式噴霧器を用いて雑草の莖葉によく附着するよう散布する。秋発生雑草には、越冬後は効果がおちるので、年内に散布する。イネ科雑草には効力が劣るので、メヒシバなどが優占している畑では使用しない。降雨直前の散布は避ける。

他の作物、とくに広葉作物のナタネ・ビート・エンドウ・ソラマメ等に薬液がかからないよう注意すると共に、原液や散布液の残りを直接河川に流さないように注意する。

レンザー

Lenacil水和剤

(取扱会社)

丸 和 物 産 株 式 会 社

性状・作用特性：本剤はH-634の試験名で試験されてきた除草剤で、本年度は甘藷に実用化が認められた。その他、ビートには既に実用化されている。なお、そ菜ではホーレン草、イチゴに実用化されている。その主成分は、3・シクロヘキシル・5・0・トリメチレンウラシルで、剤型は80%水和性微粉末である。

本剤の作用特性は、非ホルモン型移行型除草剤である。播種後や苗植付後に散布することにより、土壤表面に処理層をつくり、そこから発生する雑草を抑制するという土壤処理用除草剤である。雑草種類間における選択殺草性は、一年生雑草については認められない。

適用雑草は、一年生のイネ科・広葉雑草いずれにも、また発生前・後処理に関係なく、高い除草効果を示すが、生育の進んだものやツユクサには劣る。

土壤中の残効期間は極めて長く、その移動程度は小さい。また、温度による効果の変動はない。

作物に対する薬害については、ビートでは土性によつて根部吸収薬害が懸念されるが、洪積火山灰では安全であり、また甘藷では殆んど薬害が認められないが、早堀用甘藷については現在試験中であるので漸らくの間使用しない。全般的にみると、本剤は殆んど接触殺草力はないので、作物の生育期処理でも安全である。

人畜毒性は、ラッテ径口LD50が11,000mg/Kgと安全である。

使用方法：ビートには播種後に10アール当り製品200～300gを、また甘藷には挿苗後に同100～150gをそれぞれ約100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。

適用土壤は、甘藷では全域可能であるが、ビートでは洪積火山灰畑において使用する。早堀用甘藷には、当分の間使用しない。

生育した雑草には効果が少ないので、雑草発生前か、いつたん手取除草後に散布する。また、土壤が乾燥している場合には効果が低下するので、雨あがりのときのように土壤が充分湿つているときに使用する。

本剤は、この他ハウレンソウの播種後処理及びイチゴの植付後処理用としても使用される。